



今年も大学入試の季節がやってきた。入試は受験生にとって人生の一大事だということはいうまでもないが、実は実施する大学にとっても大変気を使う最重要行事である。

問題作成、試験実施、採点、どれも滞りなく進行して当たり前。万一出題ミスでもあろうものなら、屈辱的な記者会見を開いて謝罪しなければならなくなる。最近では、英語の聞き取りテストも始まり、その間はキャンパス内を車両通行止めにするほど細心の注意を払っている。

さて、そこまで費用と労力をかけて実施される入試は、受験生の真の学力を試し、潜在力のある学生を選抜するのに成功しているといえるだろうか。残念ながら答えはノーであろう。私の周りの学生を見ても、学力差はかなり

入試の功罪

大きい。大学院レベルの実力の学部生もいれば、早々に落ちこぼれてしまう学生もいるなど、入試の洗礼を受けたとは思えないほど千差万別だ。しかし、それはそれでよいのではな

山内 直人



大阪大国際公共政策研究科教授

多様な学生選びたい

いか。もし、入試によるふるい分けが完璧であれば、偏差値による輪切りと大学の序列化が一層進んでしまうだろう。入試が不完全だからこそ、いろいろな学生が集まり、大学に活力が生まれるのだとポジティブに考えたい。

米国などの大学で重視される「ダイバーシティ」、つまり多様性の確保は日本の大学でも同様に重要だと思う。国籍や年齢、出身階層の異なる学生たちが刺激し合うことがキャンパスの活性化につながるだろう。

しかし最近では、親の経済力によって行ける大学のレベルが決まる傾向が出てきているようで、大いに気掛かりだ。学歴を媒介にして、格差社会が世代を超えて再生産されるようになってしまったのかもしれない。もうひとつ気掛かりなのは、大学や学部の選択を誤ったと感じている学生

が多いことである。せっかく入学したのにやる気を失い不登校になる学生には、しばしばこうした原因が垣間見える。逆に、他大学から難関の試験を受けて編入してくるのは、高い意識を持った学生が多い。大学や学部の選択に

ふるさと伝言

は高校や予備校の進路指導が大きな影響を与えているだろうが、大学側が教育内容や卒業後の進路を正しく受験生に知らせる責任も大きいと思う。

家で子供たちの宿題を見ていると、こんなことを覚えて何の役に立つのだろうと疑問に思うような問題に出くわすことがある。そつえばわれわれの受験時代、たとえば今となっては何の意味もないソ連のコンビナートの名前などをひたすら覚えさせられたことが記憶の片隅に残っている。

大学入試が高校や中学の教育に与える影響は大きく、やり方次第では教育内容を歪めてしまう。重箱の隅をつつくような入試問題を毎年再生産している私たちにも責任の一端があると思うと複雑な気持ちになる。偏差値偏重を見直すべく導入された推薦入試、一芸入試、AO入試などにも見直しの動きがある。個性豊かな学生を発掘できるような新しい選抜方法が考案できないか、再検討してみる価値は十分あると思う。

(やまうち・なおと、松山市出身)